

L'ENVOLEE

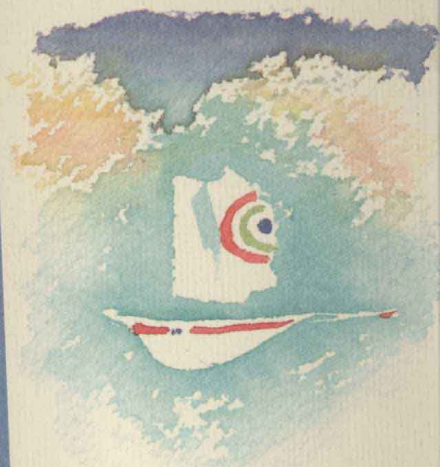
ランヴォレ

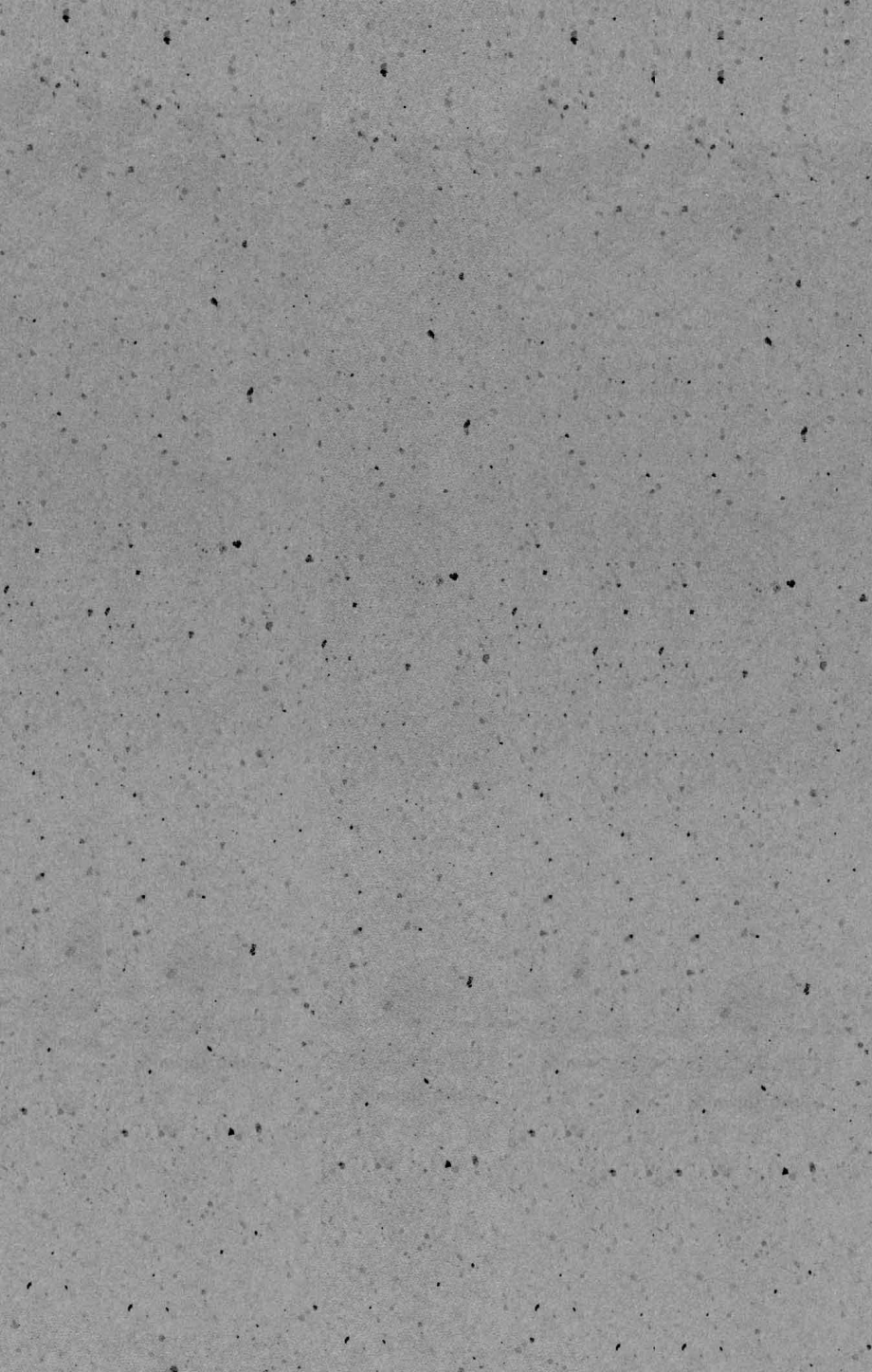
飛翔

Marianne Paulot

マリアンヌ・ポロー
芳川ゆかり

訳





Marianne PAULOT : L' ENVOLEE
© Belfond 1990

This book is published in Japan by arrangement with les Editions Belfond, Paris,
through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

ランヴォレ —— 飛翔

著者 マリアンヌ・ポロー

訳者 芳川ゆかり

1993.4.15 初版印刷 1993.4.20 初版発行

発行者 井田洋二

発行所 株式会社 駿河台出版社 〒101東京都千代田区神田駿河台 3 の 7
電話03(3291)1676 FAX03(3291)1675
振替東京9-56669

印刷所 フォレスト

製本所 関山製本社

ISBN4-411-00291-4 C0097 P1200E

ヴェロに捧ぐ

「年齢なんてとるにたらない。……十六歳の若者はめったに筆をとらないなんて思ったら大まちがい。そんな連中は捨てるほどいる。」

——レーモン・ラディゲ『遊戲の規則』より——

1989・4・8

わたしってだれ？

わたしみたいに話さないではいられなくて、でも、人から話しかけられない娘なんて、ほんとにいいないと思う！

だから、日記をつけることにしたの。わたしの名前は、リュシー。年は十五歳。とても長くてまっすぐな黒い髪をしていて、瞳の色はターコイズ・ブルー。その取り合せ、けっこうステキ！ リザならそう言ってくれると思う。リザって、わたしの一番の親友。とても気持ちのいい娘で、とても厚かましい。わたしも、どちらかというと恐いもの知らずだけど、どんな形容詞が似合うかっていったら、きつと、エネルギーで、食いしん坊で、変わっていて、ブツブツ言うのが好きな娘。広いアパートマンに、両親と二人の妹たちと住んでるの。妹たちって、いやになるくらいうるさい。それに双子。だからってわけじゃないと思うけど、妹たちはしたい放題！

今日はここまで。じゃあね。

リュシー

ハイ！

今日、リザのところに行ってきた。二人でウィンドーショッピング。ほんとのこと言つて、リザが買った服つて、超カッコイイ趣味とは言にくいんだ！特に、スカートは説明の価値ありね。ミニで腿の半分までしかないの。全体は黒のレザーで、ところどころに赤い幾何学模様が入っていて、見るからに、ペアーのブーツやブルゾンやセーターといつしよじゃないと、買えないようなスカートなの！お店の人も言つてたわ。「こんなにいい品を、バラバラにしてしまうなんて、犯罪みたいなものですよ！想像して下さいよ。あの微笑みのないモナリザとか、あの眼差しのないモナリザを！」

まったく、モナリザにしてもレオナルド・ダ・ヴィンチにしても、いつの日か、レヴィ通りのブティックの店員がレザーのアンサンブルを売るのに、自分たちをだしにするなんて、思つてもみなかったでしょうね！

バイ
イ。

リ
ユ
シ
ー

1989・4・10

ハイ！

一九七三年四月十日。ちょうど十六年前の今日、世界はスッゴク豊かになったのよね。ひとりの天才が誕生したっていうか、ひとりの美人が出現したっていうか（なんだかくすぐったいなあ）。そう、この人というのが、このETみたいに完璧なのが、わたし。いまから十六年前に生まれたのは、わたし。わたしよ。このわたし。このわたしなの！（ミジメー、だって何でこんなにあつという間なの）とうとう十六歳！ その気になれば、学校だってやめられる！ もう十六歳。十六歳のわたしが笑い、泣き、そして考える。十六歳。残念ながら、完璧に幸福だったのは、十六年間のうち八年だけ！ だって、そのあと、双子の妹が生まれたってわけ。でも、ぜいたくは言わない。妹たちはかわいいし、とてもいい子。それに二人はわたしのことが大好き！ これ以上、何を望むのか、ですって？

静かな時間！ 十六歳……

それは受け入れるのがキツイ年齢よ、間違いない。
キスをあげるわね！

リュシー

1989・4・11

学校をやめていいか、両親に聞いてみた。答えはダメ（内心、ダメって言われることを少しは期待していた）。

本当のところ、十六歳になったからといって、なんにも変わらない。いいえ、変わったわ！ 大違い！ 前とちがつて、二人の厄介な妹たちを小学校に迎えに行かなくちゃいけないの！ 今日の二人ときたら、手におえなかった！ あんまりひどいので、ワインを置いてある地下室に閉じこめてやった。どうしてなのかいまだに分からないけど、パパとママに叱られた。でも、もう二人の言うことなんか聞いていなかったけれど！ 思うんだけど、ママは大げさよ。お医者呼んで、妹たちが病気になるっていいないか診てもらうんだから！ お医者言うには、妹たちは気管支炎で、一週間、ベッドで安静にしていなくちゃいけないの。いっそ、死んでくれたらよかったのに。でも、一週間、煩わされないというだけで、最高！ 明日で、春休みも終わり！

1989・4・12

いよいよ新学期。リザはもちろん、例の豪華なスカートをわたしたちに披露してくれたというわけ！ 彼女、みんなにからかわれたので、すぐにはまたあのスカートをはけないんじゃないかしら！

ひとり、転校生があつた。名前はダヴィッド。英語の時間の途中で入ってきたの。カナダ出身の男の子。ところでカナダって言えば、夏休みにひよつとしたら行くかもしれない。それにしても、パパとママのくれるお小遣いは少ないと思う！ そのことを話したら、放課後、少しアルバイトでもしたら、だって。考えとしてはそんなに古くない。両親にしては例外的！

双子の妹たちが四〇度五分の熱！ いいぞ！ とうとう、二人のか細い小さな声も聞こえなくなった！ いままさに、わたしは静かであることの価値を味わっている！

キスをあげる。バーイ。

なんてこと！ ひどい話！ 妹たちが治ってしまったなんて。ママは、安全を考えて、地下室の鍵をしまいこんでしまったし……

英語の平常テストでひどい点をとってしまった。そう、0点。でも、いいこと、これ以上さがりつこないんだから！ 当然かもしれないけど、妹たちときたら、この機会を逃さないとはかりに、パパに思い出させちゃったの。平均以下の点をとったら、一週間外出禁止にするっていう約束を！ ヤレヤレ。リザが土曜日にダンス・パーティーをやることになったの。とにかく、なんとかしてこのひどいペナルティを許してもらおう口実を見つけなくちゃ！

じゃあ、キスをいっぱいあげるわ。

リュシー

1989・4・16

土曜日にリザのところに行けるよう、許してもらう手立てを考えた。

ハンガー・ストライキをする。

泣いてみせて、両親をほろりとさせる。

逃げだす。

自殺するといつて脅す。

金曜日の晩までイイコにする。

つぎのテストで満点をとる。

最初の方法に決めようと思う！ きついかもしれない！ でも、ともかく、今のわたしは十六歳にもなっているんだから。なんだってできないことはない！

チュ、チュ、チュ……

1989・4・17（リザのパーティーの前日）

痛い。ウーン、イテテ……。お腹がグーグー鳴る！ 何も飲まず食わずというのは、つらい。さつき、妹たちがチョコ・パンをほうばっているのを見たときには、もう少しで誓いを破るところだった。でも、なんとかふんばった。両親のほうが、厄介だった！ 食べてとうるさくせがむから、リザのパーティーに行かせてくれるなら言うことを聞いてもいいけど、って言ってやった。でも、折れてくるのは両親のほうだと思う。だって、二人が話してるのを聞いてしまったんですもの。パパとママは、こんなふうに言い合っていた。

ママ「あの娘、かわいそうよ。行かせてあげましょうよ……」

パパ「言語道断さ！」

ママ「どうして？」

パパ「だって、プリューヌとエトワール（これが妹たちの名前）も、これは好い手だと思うだろう。罰を与えるたびに、ハンガー・ストライキをまねするよ、きつと！」

ママ「だからといって、あの娘を餓死させていいってことにならないでしょ！」